

静脈瘤の治療器を開発

広島大など 一部自動化「世界初」

と
 広島大病院(広島市南区) ユニタック(尾道市)、広
 とレーザー電源装置開発の 島原は31日、脚の静脈がこ



治療器の使い方を説明する末田名誉教授

ぶ状に浮き出る「下肢静脈瘤」の治療器を開発したと発表した。競合品は全て海外製で国産は初めて。操作の一部自動化する「世界初」の仕組みを備えた。下肢静脈瘤は、脚の静脈にある血液の逆流を、防ぐ弁の機能が低下して起る。心臓へ戻るべき血がたまり、こぶ状になる。治療器は血管に光ファイバーを挿入して内部をレーザー光で焼き、血流を止めて治す。治療では、血管にむらなく光が当たるよう挿入した光ファイバーをゆっくり引き抜く必要がある。既存商品は医師の手技によるが、新商品では自動化。同病院で

あつた。末田名誉教授(心臓血管科)は、医師の技量差を均一に焼き、治療が受けられる」と説明した。医学、工学の連携、産業の育成を図る工連携プロジェクト。果、国の補助金を受けて開発したため、価格が大幅に低く、低価格が実現し、2割安で販売。医療用レーザー治療装置製造実績があつた。